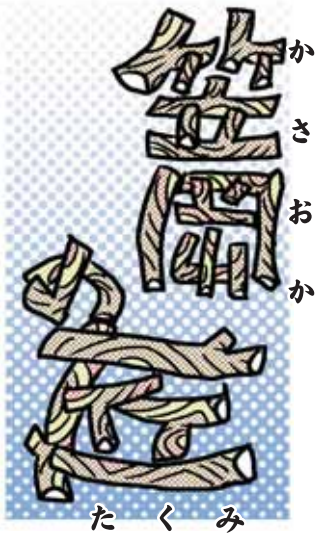

腕に確かな技術を持つ人がいる。その腕で作られるものが人々を魅了する。

このコーナーでは、そんなキラリと光る技を持つ「匠」たちを紹介します。

第五回　木工・わら細工づくり
藤原建夫さん（西大島）

▲藤原さん作「宝船」

自宅の玄関を開けると、目に飛び込んでくる大きな和凧。北は東北、南は九州、中国の凧までつくったという作品は、廊下の壁をも覆い尽くします。部屋に入れば、かわいらしい人形の竹細工や動物の木工細工、わらでつくった門松や宝船…。さまざまな材料でつくったたくさんの作品が並んでいます。

「もともとは、竹細工から始めたんですよ。仕事を辞めてからふと自分の父親がこしらえた大名行列の竹細工を見て、これを自分の手でつくってみようと。」それから約二十年、作品の幅も広がり、つくった作品数も忘れてしまうほど。

できあがった作品の多くを、友人や地域の幼稚園児などにプレゼントしているという藤原さん。「私の作品は、人間関係をつくったり、深めたりするためのきっかけなんです。みんなが喜ぶ顔を見ると、私もうれしくなってきますね。」

これからも、たくさんの人を笑顔にさせてくれる作品を作り続けてくださいね。

竹喬美術館の光彩 37

冬日帖（とうじつちょう）
故里の郊外（下絵）
小野竹喬　作
昭和3（1928）年
37.7×45.8cm

「故里で一月足らずを、あちこちと取材に廻った。或る時は神島まで渡って、海岸のほとりの岩一つを探し求めた。又或る山中では、叢（くさむら）の中の水音を聞きつけると、丈高い枯草をかきわけて、這（は）入っていった。其（そ）所には小さな池があった。私は不図（ふと）このように彷徨（ほうこう）する自分を見いだして、西行や芭蕉の詩境を偲んだのである。恰（あた）かも、私も旅人であるかのように…。しかし、このあたりの景色は、乾燥して明るく平面的で、陰影の暗い翳（かげ）は無かった。」（竹喬のことば）

この絵は下絵である。それだけに、竹喬の筆のあとがはっきりとわかる。絵になる材料を探して見つめた故里は、子どもの頃見た景色とは違う意味を持っていたかもしれない。しかし、なだらかな丘陵をたどる線はゆったりと丁寧で、描かれた風景からは自然と穏やかさが醸し出されている。

展覧会と行事のご案内

伊藤仁三郎（いとうにさぶろう）展
～2月5日㈰
伊藤仁三郎の独自の世界をお楽しみください。

楽しむNight講座
「古備前と金重陶陽」
講師…上西節雄氏
（倉敷市立美術館長）
1月14日㈯
18：00～19：30
展示も20：00まで鑑賞できます。要申込み。入館料のみ必要。

〒714-0087
笠岡市六番町1-17
☎63-3967
ホームページ
http://www.city.kasaoka.okayama.jp/0013/0001.html

今月の表紙

「晴れの国おかやま国体」で熱狂と感動に包まれた思い出は、鮮明に心に刻まれている。今、その熱い記憶を心地よく冷ますように、笠岡の新しい夜明けが静かに訪れようとしている。

広い海が大干拓に変わる様子を、そして駅前の町並みが近代的に変化していく課程をそっと見守り続けてきた古城山。笠岡の歴史を知るこの山に、瀬戸の向こうから昇る朝日が降りそそぎ、二〇〇六年が始まる…。

係から

明けましておめでとうございます。

国体イヤーの平成17年は、民泊協力会を中心に地域の絆が深まり、取材を通して市民の一体感を肌で感じた一年でした。

試合会場での熱烈な応援や、ボランティアの皆さんの献身的な活躍からは、ひとつの目標に向かって一致団結したときの、市民の底力とも言える大きなパワーが伝わってきました。

迎えた平成18年も〝みんなが主役〟です。笑顔あふれる笠岡市のまちづくりに、ご支援をお願いします。（中）

発行日／平成18年1月1日
発行／笠岡市役所
編集／企画政策課
〒714-8601 笠岡市中央町1-1
☎69-2114
印刷／アドハウス　☎66-4670

笠岡市ホームページ：http://www.city.kasaoka.okayama.jp
メールアドレス：kouhou@city.kasaoka.okayama.jp

PRINTED WITH SOY INK ※この広報は再生紙を使用し地球環境にやさしい植物性大豆油インキで印刷しています。
R100 古紙配合率100％の再生紙を使用しています